

第 86 回

全国スポーツ施設 研究協議大会 報告書

令和8年6月4日(木)

開会式

〔フォトギャラリー〕



主催者あいさつ

公益財団法人 日本スポーツ施設協会

会長 **大東 和美**



祝辞

スポーツ庁

スポーツ地域振興調査官 **伊賀本 雅義**



歓迎のことば

佐賀県 SSP 推進局

副局長 **瀬戸 要**

主催者あいさつ

公益財団法人 日本スポーツ施設協会

会長 **大東 和美**

第86回全国スポーツ施設研究協議大会の開催に当たり、主催者として一言ごあいさつを申し上げます。

本日は、ご多用のところ全国から多くの皆様にご参加をいただき、誠にありがとうございます。併せて、ご参加の皆様には、日頃から全国各地における体育・スポーツ施設の環境整備や管理運営を通じて、わが国のスポーツの振興・推進にご尽力いただいておりますこと、心から敬意と感謝を申し上げます。

令和4年度からスタートしたわが国のスポーツ政策の方向性を示す「第3期スポーツ基本計画」も本年度で最終年度を迎えます。この間、国民がスポーツを「する」「みる」「ささえる」ことを真に実現できる社会を目指し、国・自治体・スポーツ団体・民間事業者など、多様な関係者との連携・協力の下、多くの重点施策の推進が図られて参りました。

それら施策推進のための中心的基盤となるのが全国各地の体育・スポーツ施設であり、施設の整備・充実が重要課題であることは申し上げるまでもありません。本年度は第3期計画期間の総仕上げの年として、これまでの取組の成果を踏まえつつ、施設の安全性・利便性の向上、地域特性に応じた機能強化を一層推進することが求められています。

一方、昨年、「スポーツ基本法」が14年ぶりに大幅改正され施行されました。スポーツ施設の整備等に関しては、これまで施設整備と都市計画が分離して考えられることがありましたが、法律改正により「スポーツ施設の整備及び活用に当たっては、複合的な整備、スポーツ産業の事業者や関係者との連携により、まちづくりとの一体的な推進を図り、地域経済の活性化、活力ある地域社会の形成に資するよう努めるものとする」とされました。

既に、ここ数年、スポーツを経済・地域の活性化に資する貴重な地域資源と捉え、スポーツを取り巻く環境の変化を踏まえながら、各地域の魅力あるスポーツ資源の更なる活用促進や、新たなスポーツ資源の創出等に取り組むなど、スポーツによる経済・地域の活性化、スポーツの成長産業化を推進する動きも活発化しています。

このように、今後ますます、全国の体育・スポーツ施設が、わが国のスポーツの振興のみならず、地域活性化の核として重要な役割を担うことが求められて参ります。

本研究協議大会は、全国の体育・スポーツ施設関係者、スポーツ行政関係者が一堂に会し、スポーツ施設等に関する最新情報を共有するとともに、研究協議、相互理解を通じて、より良いスポーツ施設のあり方について深く掘り下げることを目的として開催するものです。

ご参加の皆様には、スポーツ施設に関する諸課題についてご研鑽いただくとともに各地域にお持ち帰りいただき、全国の体育・スポーツ施設の整備・充実、安全・安心で持続可能な体育・スポーツ施設づくりに向けて、より一層のご尽力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、本研究協議大会の開催に当たり、スポーツ庁をはじめ、佐賀県、佐賀県スポーツ施設協会並びに関係各位のご協力に心から御礼を申し上げ、あいさつといたします。

祝 辞

スポーツ庁

スポーツ地域振興調査官 **伊賀本 雅義**

本日は、第86回全国スポーツ施設研究協議大会への出席の機会をいただきまして、誠にありがとうございます。関係者の皆様には心より御礼申し上げます。

私は、今年4月にスポーツ庁に着任いたしまして、現場の状況や課題について学んでいる段階ですが、本日、このように多くのご経験をお持ちの皆様のお話をお伺いできる機会をいただきまして、大変ありがたく思っております。

「第3期スポーツ基本計画」が最終年度を迎えており、現在「第4期スポーツ基本計画」の策定を検討しているところです。現行の第3期計画には、地域において誰もが気軽にスポーツを親しめる「場」づくりを掲げています。その実現にあたっては、スポーツ施設の整備や老朽化対策、ユニバーサルデザインの推進や安全性の確保はもちろんのこと、スポーツが地域振興にもたらす様々な効果を十分に発揮させながら、「量」的・「質」的にスポーツ施設のストック最適化を図っていくことが必要です。

昨年度は、「スポーツ基本法」、「都市再生特別措置法」が改正され、スポーツをより街づくりの拠点として位置づけていく機運も高まっています。今後とも、皆様の新しい取組を応援し、またいろいろな創意工夫を勉強させていただきながら、より良いスポーツ環境の創出に努めて参りたいと思いますので、より一層のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、皆様の一層のご発展とご健勝を心よりお祈り申し上げまして、祝辞とさせていただきます。

歓迎のことば

佐賀県 SSP 推進局

副局長 瀬戸 要

本日ここ佐賀県において、第86回全国スポーツ施設研究協議大会が盛大に開催されますことを、心からお喜び申し上げます。日本スポーツ施設協会の大東会長、スポーツ庁の伊賀本調査官、そして全国各地でスポーツ施設に関わる多くの皆様方、ようこそ佐賀県へお越しくださいました。開催地を代表して歓迎申し上げます。

佐賀県では、2018年より佐賀から世界に挑戦するトップアスリートの育成とともに、「する」「観る」「支える」、加えて「育てる」「稼ぐ」といったビジネス面での好循環も含め、スポーツ文化の裾野拡大を目指す「SAGAスポーツピラミッド（SSP）構想」をスタートし、今年で9年目に入ります。2024年に佐賀県全市町を舞台にした「SAGA2024国スポ・全障スポ」では、“体育”から“スポーツ”へと変わる新しい大会として100を超える新しいチャレンジを行い、おかげさまで全国から多くの注目をいただきました。

私たちは、このSAGA2024の準備段階からSSP構想の観点で、大会はゴールではなく、未来への跳躍点ということを明確に位置付け、常に大会を見据えてまいりました。そのことを象徴する一つが、大会のメイン会場として整備しました「SAGAサンライズパーク」です。明日皆様にご視察いただく中核施設の「SAGAアリーナ」は、Bリーグの「佐賀バルーンズ」、そして先日SVリーグを制覇したばかりの「SAGA久光スプリングス」と2つのプロチームのホーム拠点として、シーズン中は大変熱狂的なファンの皆様で連日にぎわっているところです。また、スポーツのみならず、例えばB'zやPerfumeといったエンタメ系のコンサートも続々と開催されており、今年の11月にはMr.Childrenのコンサートも開催予定です。その他にも、日本青年会議所全国大会をはじめ全国規模のMICEの利用があり、今年7月にはSAGA×WOMAN EXPO2026、10月には全国産業教育フェア、そして年明け3月にはコスメ国際フォーラム2027などが続々と開催されます。

SAGAアリーナを車が前提の郊外型施設ではなく、歩くライフスタイルの推進を強く意識した都市型施設としたことで、佐賀駅からSAGAサンライズパークまで20分ほどの距離を楽しみながら歩く様子が見られ、人の流れが明らかに変わりました。今では、プロスポーツの多くのファンや家族連れが駅から会場まで徒歩で楽しみながら、試合の勝ち負けを超え、仮に負けたとしてもお酒や食事を楽しみながら交流するなど、街の姿が大きく変化しています。国土交通省から発表された2026年の地価公示では、都道府県庁所在地の商業地において、佐賀市が地価上昇率で全国3位となりました。SAGAアリーナをきっかけに、ホテル進出の民間投資も促進され、加えて県民のシビックプライド、地域の愛着・誇りがこの情勢に非常に大きく起与していると考えております。

本日は、全国の研究成果や実践事例が共有される大変貴重な機会と承知しております。本会における議論と交流が今後の全国スポーツ施設のあり方、ひいては全国の地域づくりの新たな未来を切り開く素晴らしい機会となることを祈念しまして、歓迎のことばといたします。

第9回 スポーツファシリティーズ大賞表彰

〔フォトギャラリー〕



スポーツ庁長官賞

管理・運営部門

さわやかアリーナ袋井市総合体育館
袋井アリーナ PFI（株）
運営企業 シンコースポーツ（株）



公益財団法人日本スポーツ施設協会 会長賞 施設計画部門

徳洲会ジムナスティクスアリーナ
（一社）徳洲会 徳洲会体操クラブ
（株）DESIGNSHIP



公益財団法人日本スポーツ施設協会 会長賞 管理・運営部門

ウインドヒルくしろスーパーアリーナ（湿原の風アリーナ釧路）
（特非）東北北海道スポーツコミッション

令和 8 年度 スポーツ施設功労者表彰

[フォトギャラリー]

▽表彰状受賞者

加盟団体	45 名
特別会員	15 名
特別会員部会部会長推薦会社	3 社

▽感謝状受賞者

加盟団体役員	7 名
特別会員部会部会長推薦	2 名
長期継続特別会員	1 社



表彰状受賞者代表

佐賀県 (株) SAGA サンシャインフォレスト
後藤 惇志



感謝状受賞者代表

滋賀県 彦根総合スポーツ公園 辰巳 直樹



代表者謝辞

佐賀県 (株) SAGA サンシャインフォレスト
益田 千恵子

サロンパスアリーナ ～練習施設を超えた地域拠点を目指して～

元女子バレーボール日本代表キャプテン
SAGA 久光スプリングス株式会社

岩坂 名奈



自己紹介

出身は福岡県で、周りでは小学校からバレーボールを始める選手が多かったが、私は少し遅く、中学校からだった。中学3年で県選抜に選ばれ、高校は大分県にある東九州龍谷高校に進学した。全国大会に初めて出場したときは、会場も大きく、観客の前でプレーするのも何もかも初めてだったので、ずっと緊張していたのを覚えている。高校最後の春高バレー、インターハイで優勝したが、地元大分で開催された国体では、残念ながら準優勝で終わってしまった。

進路を考えはじめたのは高校2年のときで、プロの世界に挑戦してみたいという気持ちから、久光スプリングス（現SAGA久光スプリングス）に入団が決まった。当初は全てが初めての経験で、先輩たちについていくのに必死だったのを覚えている。2年目ごろからスタメンの機会も徐々に増えたが、このままでは通用しない、もっと頑張らなければと強く思っていた。

入団3年目のとき、私のバレー人生が大きく変わる出来事があった。中田久美監督との出会いである。中田監督に様々なことを教えてもらい、バレーに対する考え方や取り組み方ががらりと変わった。スプリングスでは、リーグ優勝や皇后杯優勝、アジアク

ラブ選手権でのタイトル獲得等、チームメイトと多くの喜びの瞬間を共有することができた。特に、2013年に国体、皇后杯、リーグ、日韓トップマッチ、黒鷲旗の大会で優勝し、シーズン5冠を達成したことはとても印象に残っている。

2009年に初めて日本代表に選出され、国際大会など経験も積むことができた。2017年には当時の代表監督の中田監督から打診があり、高校チームでも経験したことがなかったが、日本代表のキャプテンに選ばれた。歴代キャプテンは絶対的存在感やエースで引っ張っている人で、私はどちらにも当てはまらないというのが率直な思いだった。チームをまとめる難しさをととても感じた3年間であったし、葛藤しながら、アスリートとしての技術というよりも人としてどうあるべきか、周りに何を言われようと自分らしさを貫く大変さ、チームづくりやコミュニケーションの取り方など多くのことを学んだ。

2021年に現役引退を決断し、引退後はチームやスポーツを支えるという立場で業務を行っている。チームをより知って応援してもらえるよう、バレーボール教室や学校訪問等、地域の活動にも携わっている。現役のときとは違ったチームとの関わり方で、フロントスタッフとして事務職などもしている。

チームの紹介

SAGA久光スプリングスは、佐賀県鳥栖市を活動拠点とする女子プロバレーボールチームで、国内リーグのSVリーグ女子に所属する九州唯一のチーム。鳥栖市内のサロンパスアリーナを練習拠点に活動し、佐賀市にある収容人数8,000人以上を誇るSAGAアリーナをホームアリーナとしている。

昨シーズンのリーグでは、4シーズンぶりの優勝を果たすことができた。ポストシーズンのセミファイナルあたりから佐賀のまちが盛り上がっていく様子を肌で感じていた。本当に多くの人に優勝を喜んでもらい、地域が一つになる様子を見て、スポーツの持つ力を改めて感じた。

佐賀に活動拠点を移転して3年になるが、多くの人に支えてもらっていることを実感している。少しずつチームが地域に根付いていく様子を肌で感じ、クラブ会員数、SNSのフォロワー数も着実に増えてきている。

サロンパスアリーナの施設概要

チームは、1948年に久光製薬の女子バレーボール部として、本社がある鳥栖市で発足した。長らく鳥栖で活動していたが、2000年に別チームとの統合をきっかけに練習拠点を兵庫県神戸市に移し、サロンパスアリーナが完成する2023年まで20年ほど神戸で活動していた。その間も、チーム創設の地である鳥栖には強い思いがあった。一方で、佐賀県においては、スポーツ施設の整備が進み、2024年国スポ・全障スポの開催を控えるなど、スポーツシーンが大きく盛り上がりを見せるなか、私たちが鳥栖市内における練習施設の建設を決定し、進めてきた。

完成の前年から市内にサテライトオフィスを開設し、私自身はスタッフとして準備を進めてきた。建設に関わる会議への参加はもちろん、活動拠点を移

転するにあたり、チームを広く知り、地元のチームとして受け入れてもらう必要もあった。地域の様々なイベントや行事に参加し、本当に多くの人がアリーナの完成、チームの活動拠点移転を楽しみにしていることが分かり、地域の温かさをととても感じた1年でもあった。その後、約1年半の期間を経て、アリーナが2023年に完成した。

サロンパスアリーナは、『「世界へはばたく」SAGAから世界へ 佐賀・鳥栖のこどもたちや女性がはばたくトレーニングアリーナ』というコンセプトのもと建設された。女子のプロスポーツチームとして女性の活躍を応援し、女性が輝くまちに貢献したいと考えている。

アリーナが有する4つの特徴の1つ目は「世界レベルの女性プロスポーツの拠点」。国際基準のバレーボール専用床を敷設し、充実した疲労回復設備を有する、世界を目指すチームのトレーニング施設となっている。

2つ目は「子どもや女性、すべての人がいきいきと輝く」。交通の要衝である鳥栖市の地の利を活かし、ジュニア・中学・高校バレー、佐賀県を中心とした九州各県のママさんバレーなど、スポーツの活動拠点として活用できるアリーナとなっている。

3つ目は「佐賀の地域スポーツ活動育成の拠点」。佐賀、鳥栖を元気にする、隣接する鳥栖スタジアムと連携したスポーツの拠点づくりを推進している。

最後の4つ目は「地球にやさしいゼロエネルギービル」。脱炭素を目指す、地球にやさしいゼロエネルギービルディングのアリーナでもある。

サロンパスアリーナには、メインアリーナやサブアリーナ、トレーニングルーム等がある。メインアリーナは主にチームの練習場所で、大型ビジョン2面や観客席約1,400席も完備しており、小中規模のイベントにも対応可能。バレーボールコート3面の広さを有しており、バレーボール専用床は通常の床板より少し弾力性がある床材で、選手の負荷軽減や

けが防止の役割を果たしており、安全面に考慮した施設となっている。

サブアリーナは、一般利用が可能で、卓球やバドミントン、バスケットボール等、スポーツ利用はもちろん、レクリエーションやイベント等、年間を通じて多くの人が利用している。

トレーニングルームは、1階がチーム専用のトレーニングエリアで、さらにクラブハウス内には、2way酸素ルームや流水プールがあるリカバリー設備、選手のニーズを受けて設計したロッカールーム、カプセルルームなどを配置している。

2階のトレーニングルームは、一般会員用のエリアで月額制。現在100名を超える会員が利用している。日本初のAIによるトレーニングプログラムを制作管理するRAXシステムを採用している。

また、コミュニティルームは企業の会議や研修会など多目的に使用でき、ラウンジはメインアリーナを一望できる開放感あふれる仕様となっている。VIPルームとしての使用や懇談など特別な空間として利用できる。

さらに、赤ちゃんや小さなお子さんのいる人でも安心して利用できるようベビールーム、キッズルームを完備している。様々な遊具等もあり、安全に楽しく利用できる空間となっている。

アリーナの果たすべき役割

私たちは、地域に必要とされるクラブチームを目指し、地元にはスポーツチームがあって良かったと思ってもらえるような存在になりたいと日々活動している。スポーツチームとして地域のハブ的な存在となり、豊かなまちづくりに貢献していきたい。

チャレンジしていることは、「社会性」と「事業性」の2つの軸の最大化である。社会的な役割をしっかりと果たしながら、チームの関係人口を増やし、ファンになってもらう事業へ波及させ、アリー

ナ事業として得た収益をより良いサービスに還元していく、この好循環を生み出していきたい。

果たすべき社会的な役割の1つ目は「地域社会活性化の創出」。地域の人々の地域内交流はもちろん、交通の要衝である鳥栖市の利便性を活かし、地域間交流を促進し、まちの活性化を創出したいと考えている。アリーナは、JR鳥栖駅より徒歩10分であり、アクセスも良好であることから、その利便性を活かして、多くの人にアリーナを利用してもらい、地域の活性化に貢献していきたいと考えている。

2つ目は「スポーツ・運動機会の増加」。地域のスポーツ活動育成の拠点として、子どもたちの育成はもちろん、ママさんバレーボールをはじめ、様々な世代の人のスポーツの機会の増加を図り、人々の健康促進に寄与していきたいと考えている。

3つ目は「国際交流機会の創出」。これまで培ってきたネットワークを活かし、海外チームを招待して親善試合を開催している。チームの強化はもちろん、地域の子どもたち等に世界レベルを実際に見てもらいたい、感じてもらいたいという思いから毎年実施している。九州はアジアとのアクセスも良いことから、これからも国際的な交流を図り、スポーツを通じて経済波及効果が生まれるような取組を行っていききたいと考えている。

さらに、私たちがチャレンジしていることは、収益を生む練習施設への転換である。持続可能なチーム運営とアリーナ運営を実現していくためには、収益を生むプロフィットセンターへ転換していく必要がある。施設の貸館事業、会員制トレーニングルームの運営を事業の柱としながら、自前の施設で柔軟な対応がしやすいという強みを活かし、自主事業の展開にもチャレンジしている。

SAGA スポーツピラミッド (SSP) 構想が生み出す スポーツコンプレックス

佐賀県 SSP 推進局
SSP 総括監

日野 稔邦



自己紹介

佐賀県庁に入庁して30年になるが、2018年にSAGA スポーツピラミッド (SSP) 構想の実務責任者に就任し、スポーツ政策に関わるようになった。SSP構想は、山口祥義佐賀県知事が就任前から長年にわたり持っていた問題意識をもとに作った県のスポーツ政策の基本となる柱である。

また、2023年にオープンしたSAGAアリーナにおいて、オープン前からアリーナを活かしてどのようにまちの経済効果を高めていくのかを考えるため、2019年からMICE誘致責任者を務めている。

さらに、2025年のスポーツ庁「大学スポーツ構想会議」委員、「スポーツコンプレックスに関する調査事業」有識者検討会委員も務めたので、その関連も含めてお話ししたい。

SSP 構想とは何か

SSP構想は、佐賀から世界へ挑戦するアスリートの育成を真ん中におき、選手がいずれ次世代を育てる立場になる循環、そして県民の皆さんがプレーを見て夢・感動・誇りを抱くという循環など、人づくり、地域づくりに様々な好循環を生み出す構想。県内の個人や企業の皆さんに、「する」「観る」「支え

る」「育てる」「稼ぐ」のどれかで関わっていただきたい。単なるスポーツ振興ではなく、スポーツを活かした地域経済、地域の成長を最初からターゲットに置いた政策である。

山口知事は、就任前は総務省の官僚で、ラグビーワールドカップ組織委員会に出向したとき、日本と世界のスポーツ事業で2つの大きな違いを感じたという。以下の2つの問題意識が、SSP構想の原点である。

1つは民間企業や経済をどうやって巻き込むのか、もう1つは施設面である。今日は施設の方が多いのでこの点について述べると、日本では、大会のためだけの施設整備を考えがちだ。SAGAアリーナの整備は、SAGA2024国民スポーツ大会の開催がきっかけの一つではあったが、国スポのためにつくったという自覚はない。むしろ国スポの会場には向いていない。バスケットボールやバレーボールのコートは床に1面しか敷けないからだ。しかし、そこはあまり気にしなかった。30～40年に1回の大会のためだけに何かをつくるのではなく、世界のスポーツの潮流も踏まえた上で、これからの佐賀のためにどういうものが必要なのかを考えなければいけない。

国スポは一つの跳躍点・通過点であり、国スポが終了した半年後、「SAGA スポーツピラミッド構想推進条例」を制定した。アスリート・指導者の育成、

練習環境の充実、アスリートのセカンドキャリア形成・就職支援といったアスリート目線の政策も行うが、スポーツには「する」「観る」「支える」「育てる」「稼ぐ」など様々な関わり方があるので、試合観戦や応援がしやすい環境づくりといったスポーツを支える文化の定着、「稼ぐ」という観点で、県内の企業にどんどんスポーツビジネスに参入してほしいといったことを条例の中にきちんと明記して、アスリートだけでなく多くの方が関わる県の政策として取り組んでいる。

SAGAアリーナの特徴

SAGAアリーナの基本的なコンセプトは、県民が「する拠点」ではなく、県民が「観る拠点」、企業が「稼ぐ拠点」と位置付けている。

「観る」にこだわったので、センタービジョン、壁面ビジョン、そして360度を取り囲むリボンビジョンの3つの大型ビジョンを標準装備した初のアリーナだと思う。客席の勾配を国内最大の35度と非常に高く設定し、4階席からもコートが非常にきれいに見えるすり鉢状の観客席となっている。さらに、コンサートの演目によっては女性の比率が90%以上になるので、そのための女性トイレが最大164か所ある。本当に「観る」ということにかなりこだわった設計である。

それだけではなく、「稼ぐ」という概念も大事なので、公の施設であるが、アリーナの3階部分は完全なVIPフロアとして独立させている。世界基準のスポーツホスピタリティで、富裕層にもいろいろな楽しみ方をしてもらうため、SAGA久光スプリングスや佐賀バルナーズの試合、その他のイベントでも、きちんとお金を払って使っていただく。

SAGA2024国スポのときに、国スポとしては初めてスポーツホスピタリティを実施した。女子バレーボールの決勝戦にあわせて、3階では県産品を使っ

た上質な料理と佐賀酒を提供した。今では、佐賀バルナーズの試合などは3階のホスピタリティフロアを使うのが当たり前になってきている。民間施設ではない公共施設でこのようなことをする例は今までなかった。

SAGAアリーナは、県がアリーナを設置し所有権を持っているが、指定管理者は（株）SAGAサンシャインフォレストで、県内外の企業14社で構成するジョイントベンチャーである。特徴は、佐賀バルナーズとSAGA久光スプリングスが指定管理者や運営側に入っていないことである。現在、Bプレミアの民設民営のアリーナには、一般的にチームが指定管理者に入っているか設置者側に回っていることが多い。我々は、BリーグとSVリーグという2つの異なるジャンルのスポーツがホームアリーナにしているということもあり、両チームは指定管理者ではなく、アリーナをコンスタントに使っていただく最高のパートナーという位置付けで、三者が連携しながら、SAGAアリーナはいろいろな経済波及効果を高める取組を行っている。

スポーツコンプレックス

これまでスポーツ庁は、スタジアム・アリーナ改革として体育館やアリーナ、スタジアムに、例えばホスピタリティフロアなどをつくることを促してきた。言ってみれば点としての改善である。コストセンターといわれるスポーツ施設をプロフィットセンターに変える、富を生み出す施設に変えるという点に着目した概念で、ゆくゆくは面に広げようということだが、最近ではアリーナもだいぶ増え、この点を核として、本当に面というものを重視した次のフェーズに移行しようというのがスポーツコンプレックスの考え方である。

約3年前、政府の骨太の方針にスポーツコンプレックスが明記されている。基本的には、スタジア

ム・アリーナを核としたまちづくりで、スポーツ振興だけではなく、地域経済の活性化も図っていこうという、欧米でよく見られるようなかたちに日本も一段階ギアを上げていこうということである。

昨年、スポーツ庁でスポーツコンプレックスの必須要件や推奨要件を定義する「スポーツコンプレックスに関する調査事業」有識者検討会があり、私は委員を務めた。そこで定義した必須要件は、「商圈規模を勘案した適切な施設規模」「アクセス性の確保」「施設を利用したまちづくりビジョン」「ビジョン実現に必要な組織関係の効率性」、定義した推奨要件は、「ビジョン実現に必要な機能が設計、施設に付帯・隣接」「プロクラブの参画による価値向上」「集客・人流促進機能を地域活性化に利活用」「定期的な効果検証によるエリアの運営改善」である。

佐賀の場合は、県がSAGAアリーナをつくったので、まちづくりビジョンと一体となっているが、多くのアリーナは民間デベロッパーがつくっており、必ずしもまちづくりと整合性が取れる保証ができない。そうなると官と民の連携をどうするかも重要になる。このようなスポーツコンプレックスの概念を意識して、このあとの話を聞いていただくと、より理解していただけるのではないかと思います。

SAGAアリーナは、2023年からの3年間で年平均約40万人にお越しいただき、年間50～60件のイベントを行っている。イベントはスポーツとスポーツ以外が半々ぐらいで、スポーツだけのためにつくったわけではなく、大物アーティストのコンサートなど多目的に使えるエンタメアリーナなので、我々としては狙いどおりである。

スポーツとエンタメでは、来場客の質とお金の落とし方が全く異なる。スポーツは、県内のプロチームのホームゲームを見に来るので、来場者のほとんどは県内の住民であり、アリーナ内や佐賀駅の周りなど県内の飲食効果が主になる。その意味での経済効果は薄いですが、毎週のように、佐賀バルナーズや

SAGA久光スプリングスの試合を応援するのだから、県民のシビックプライド醸成など精神的な効果は非常に高い。一方、エンタメは逆に8割が県外からの来場者である。宿泊や飲食などの経済効果は非常に大きく、さらにまちなかを回遊していただくための様々な仕掛けも県が市や民間といろいろと調整しながらつくっている。

また、県内の企業がスポーツで稼いでいける仕組みをつくるためのスポーツビジネスの伴走支援をしている。昨年から県がスポーツビジネススクールを開講し、県内約20名が受講した。例えば、このような人材育成を10年行えば、200人がスポーツやアリーナを活かして地域経済を回してくれる。アリーナをつくった意味がより高まり、県民に果実として還元される。

現在、SAGAアリーナの周りの地価がどんどん上がっている。国土交通省が今年発表した都道府県庁所在地の商業地の地価上昇率では、佐賀市が堂々の3位であった。上昇しているのは、アリーナと佐賀駅の間や駅の南側で、まさに我々がアリーナを軸にまちづくりを行っているエリアで、ホテルの建設も進んでいる。

アリーナを一つの起点にして、アリーナがまちづくり、そして地域経済の起爆剤になり、成長するというのが我々の狙いである。オープンして3年たつが、今のところは順調に来ている。ただ、各地でアリーナが完成しているし、地域の中で、このアリーナを活かして自分のビジネスにつなげようという人がどんどん出てこなければならない。我々の県庁内もそうだが、県内の民間企業における人材を育成して、挑戦を後押ししていくことが、このアリーナを活かしたまちづくりにつながるのではないかと考えている。

SAGAアリーナを核とした賑わいを生むまちづくり

株式会社梓設計九州支社
アーキテクト部門設計部 部長

加野 正知



自己紹介

私は福岡県出身で、約12年前に九州に帰ってきて設計活動をしている。梓設計は、社員数約700人、1946年創業のいわゆる組織設計事務所として様々な分野の設計に携わっており、私はスポーツ・エンターテインメントドメインという部門に属して活動している。

スポーツ・エンターテインメントドメインは、全国のスタジアムやアリーナなどに関わっており、アリーナでは今日紹介するSAGAアリーナをはじめ、BリーグやSVリーグのホームアリーナなどに携わってきた。

日本らしいスタジアム・アリーナに必要な3つの視点

我々が大事にしている3つの視点が「地域の居場所となる開かれた施設づくり」「地域とのつながりを生む施設づくり」「地域の課題解決」である。

1点目は、施設は日常的に使われ、イベント時の非日常と両立できるような施設づくりが大切で、そのことで365日賑わう施設がつかれる。2点目は、人とまちをつないでいくということが非常に大事で、つながりをつくることで、まちに賑わいが連鎖して

いく。3点目は、環境や地域への貢献、SDGsの視点を大切に計画している。

SAGA サンライズパーク

SAGA サンライズパークは、SAGA2024国スポ・障スポを契機に、その先の未来を見据えて新たな価値を創造するエリアとして誕生している。「サンライズパーク」という名前は、佐賀を光り輝かせるということと、もともとの地名が日の出だったことに由来している。

かつての佐賀総合運動場の陸上競技場を活用しながら、国道にかかっている栄光橋と、その左手にある佐賀市文化会館西側広場、そしてSAGA サンライズパークを一体的に整備した。

通常、我々は敷地の中の建築設計に携わることが多いが、今回は道路や歩道橋など全体に関わらせてもらい、本当に様々な関係者の皆さんと協働しながら、エリア全体を一体的にデザインした。

計画のポイント

①すべての人に開かれた

スポーツ・エンタメ・ウェルネス拠点

SAGA サンライズパークでは、SAGAアリーナ、

SAGA アクア、SAGA スタジアムをそれぞれ計画したが、一番の大きな特徴は、全てをペDESTリアンデッキで一体的につないだところにある。建物自体は少し閉じたような印象を受けるが、ペDESTリアンデッキがまちと一体的につながり、新しい風景をつくり出している。

②365日の賑わいが生まれる

それぞれのスタイルで楽しめる空間

365日の賑わいをつくるため、ペDESTリアンデッキの周りに沿って、いろいろ楽しめる工夫をした。地形を活かしながらペDESTリアンデッキをつくり、その下に店舗を配置している。左側の道路からテラス空間、そしてペDESTリアンデッキ、右側のスタジアムを一体的につなげる計画としている。

テラス空間は、パークテラスという名前が付いている。アリーナに向かうアプローチ空間にもなっていて、上のペDESTリアンデッキを通っても、その下のパークテラスを通ってもアリーナに行くことができる。

パークテラスの右側がテナントになっていて、飲食店やショップがある。テナントの窓を開放することでテラスと一体的につながる空間となっており、イベントのときには非常に賑わいをみせる。道路に近く、車は通っているが、静かにゆったりと過ごせるような場所になった。

ペDESTリアンデッキの一部はランニングコースになっていて、ゴムチップ舗装を施している。ペDESTリアンデッキとスタジアムの間には手すりがあり、カウンターをつくっているの、立ってスタジアムを見ながら佇んでいる人もいます。

③感動体験を生み出すシームレスにつながる

ダイナミックな空間

SAGA アリーナの隣にSAGA アクアがある。岩を削り出したような多面体の形状が特徴的で、メインアリーナ、サブアリーナ、プールなど、基準の高さが違う空間を内包している。また、アリーナから

は山並みがとてもきれいに見え、山並みとの調和を図っている。佐賀には伝統工芸がたくさんあり、その緻密さと佐賀の革新性を表現したデザインである。

25m プールを取り囲むように右からアリーナ、サブアリーナ、50m プール、飛込プールを配置している。サブアリーナが45度傾いているのがミソで、これで観客がエリアの中に入ってくるエントランスホールの間口を広くすることができ、多くの人が一斉に訪れても混雑しないような計画が生み出せた。ペDESTリアンデッキも開場前に並ぶことができるようになっている。

アリーナのエントランスは、大きく開かれたダイナミックな空間となっている。入口に覆いかぶさるような屋根があるので、例えば雨が降る日や日差しが強い日もこの下で滞留できる。

アリーナの内部は非常に広いエントランスになっている。少し上に窓があり、中がラウンジ空間で、ラウンジからはエントランス、そして佐賀の山並みも見えるつくりになっている。

2階も1階も、観客は真っすぐにアリーナに入っていけるような空間構成にしている。

④最高の観戦体験が生まれるエンタメアリーナ

メインアリーナは、競技空間にフォーカスした計画にしている。観客席は最大角度35度のすり鉢状の客席にして、施設全体は黒を基調にコートに集中できるような空間になっている。

観客席にも工夫し、本当に様々なバリエーションの観客席をつくった。また、車いす席は一番アクセスしやすく、一番観戦しやすい場所に多く配置している。テーブルも付いているので飲食もできるし、同伴者がいれば、いすを出して一緒に観ることもできる。

4階からでもコートが非常に見やすい。様々な場所から様々な楽しみ方ができるというのが、アリーナの大きな特徴である。

⑤ 80mの無柱空間をX型トラスと

多面体フレームで実現

メインアリーナは、約80mの大空間に柱を落とせないため、X型のトラスで大空間を支えている。災害時には避難所としても使えるので、耐震の安定性も確保するための計画とした。

⑥ 佐賀ならではのおもてなし空間

3階のプレミアムフロアは、佐賀を感じられる場所にしたいという思いから、佐賀ゆかりのデザイナーやアーティストと協働してつくった。県内20市町の美しい写真を切り取って展示し、伝統工芸の鍋島緞通を配した県内でつくった家具を配置している。

⑦ 光をモチーフにしたグラフィックデザイン

SAGAサンライズパークのロゴマークもオリジナルで作っており、日の出ということで光をモチーフにしたロゴである。

ロゴマークと同じモチーフ・デザインを、サインやトイレのピクトグラム、観客席の座席番号、広報など様々な場面で展開し、ブランド力を高めている。

⑧ パーク全体をシームレスにつなぐ光の帯

正面玄関は、特徴的なパーク全体をつなぐベデストリアンデッキにさらに一体感を持たせたいという思いから、デッキの手すりに照明を設置した。

エリアをつなぐ栄光橋のライトアップもしている。夜間にもランニングする人がたくさんいるので、何か楽しんで走れる工夫はできないかとスポットライトを付けた。また、スタジアムのメインスタンドを見上げる場所に照明を設置し、季節によって色が変わったり、流れたりする演出をしている。

⑨ 持続可能な地域の拠点づくり

我々は、持続可能な地域の拠点を目指して計画を進めてきた。いろいろな建物があって、使う時間も使い方も違うが、一体的にエネルギー供給をすることで負荷の平準化を図れるのではないかと考え、飛込プールのところでエネルギーセンターを一体的に計画している。ここに電気やガス、水道の供給をし

て、自然エネルギーも活用しているので、太陽光、太陽熱、地中熱など様々なエネルギーを組み合わせることで平準化が図れている。

万が一の災害のときには、アリーナとプールが避難所として使える。アリーナは広いコンクリートの床があるので、災害時の物資を集積できるような使い方も想定した計画にしている。

そして、土地の記憶を未来につなげている。もともと佐賀総合運動場にはモミジバフウの並木があり、一部を新しくできたパークテラスに残すことで、地域に親しまれた風景を再現している。さらに、工事のとき台風で倒れてしまったマツの木を活用して佐賀出身の造形作家に「マツコダマ」というモニュメントを作成していただき、1階に展示している。

また、「スポーツのチカラ」を活かした地域づくりとして、バスケットゴールや三段跳の絵と世界記録や中高生の記録などを壁に刻み、全体を周回するランニングコースには、大隈重信など佐賀の八賢人の名言を配置したパネルを展示している。

さらに、もともと陸上競技場にあった照明柱に佐賀出身のアーティストがアートを施している。これらは、この土地に積み重ねられた歴史や記憶を未来につなぐことを考え、計画した。

スポーツ、エンターテインメント、ウェルネス

SAGAサンライズパークは、スポーツ、エンターテインメント、ウェルネスをテーマに計画してきたが、まさしくその価値を届けられているのではないと思う。佐賀市の公示地価上昇率が全国3位になったという新聞記事では、SAGAアリーナのイベントが賑わいに貢献していると書かれている。

その他、日常的にもジョギングや散歩で訪れる人の姿があり、本当にいい風景がみられている。まちとつながった日常的な居場所として親しまれているのではないと思う。

閉会式

次回開催県あいさつ

滋賀県スポーツ施設協会

藪 任作



次回開催県を代表いたしまして、一言ごあいさつを申し上げます。

本日、佐賀県におきまして、第86回全国スポーツ施設研究協議大会が多くの皆様のご参加のもと、盛大に開催されましたことを心よりお喜び申し上げます。あわせて、本大会の開催にご尽力いただきました日本スポーツ施設協会の皆様、佐賀県スポーツ施設協会をはじめ関係者の皆様に厚くお礼を申し上げます。

次期開催は滋賀県でございます。滋賀県は日本最大の湖であります琵琶湖を有し、豊かな自然と美しい景観に恵まれています。また、古くから交通と文化の要衝として発展し、歴史ある神社仏閣、戦国ゆかりの多彩な歴史や文化を有しています。私ども滋賀県スポーツ施設協会では、全国からお越しいただく皆様にとって有意義な実りある研究協議大会が、この佐賀に引き続き開催できるよう努めて参りたいと思っております。

近年、スポーツをとりまく環境は大きく変革しております。ウェルビーイングの向上やスポーツ権の実現を目指し、昨年にはスポーツ基本法の改正が行われました。また、スポーツ指導者の現場では、プレーヤーズセンタードの考え方を基盤として、新たな知識や価値観を学び続けることが求められております。私たちスポーツ施設に携わる者も同様に、施設の管理運営に関する知識や技術を絶えずアップデートし、利用者の皆様の安心安全を確保することが重要です。

さらに、第4期スポーツ基本計画においては、施設の安全の性能向上、耐震化、災害時の避難場所機能の充実など、スポーツ施設の効率化が推進されているところです。スポーツ施設は単なる活動の場ではなく、人々の健康づくりや仲間づくり、地域のコミュニティの形成、そして自己肯定感の向上など一人ひとりのウェルビーイングを支える大きな社会基盤であると思っております。

次回滋賀大会では、これらのスポーツ施設の役割や可能性について皆様とともに学び考え、未来につながる新たな気付きや交流が生まれるような大会になるよう努めて参ります。是非、多くの皆様に滋賀県にお越しいただき、いろいろと新しい知識を勉強できる機会を提供できるよう努めたいと思っております。

結びに、日本スポーツ施設協会のますますのご発展と会員となる有資格者の皆様のご健勝とご活躍をお祈りし、閉会式として次回開催県のあいさつとさせていただきます。

令和8年6月5日(金) 施設視察

2日目は、2つの班に分かれて、SAGAアリーナ、SAGAアクア、グラスコート佐賀テニスクラブを視察した。

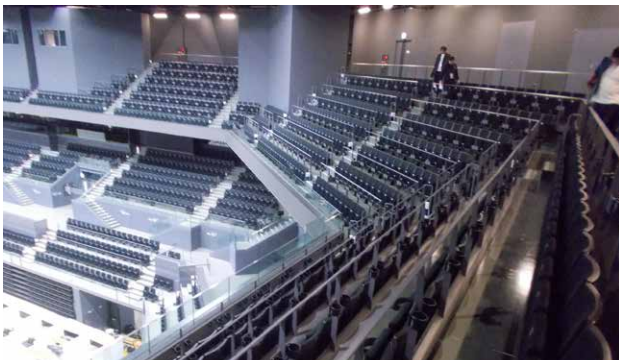


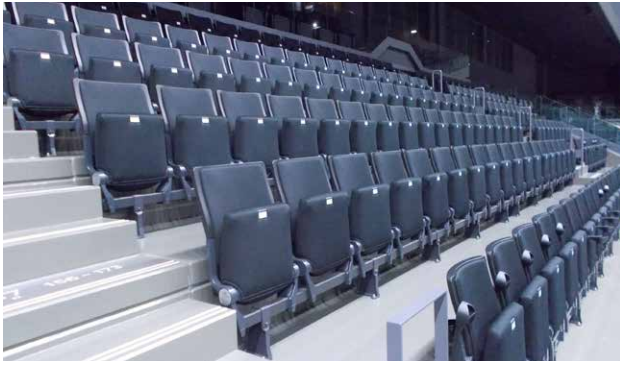
SAGAアリーナ

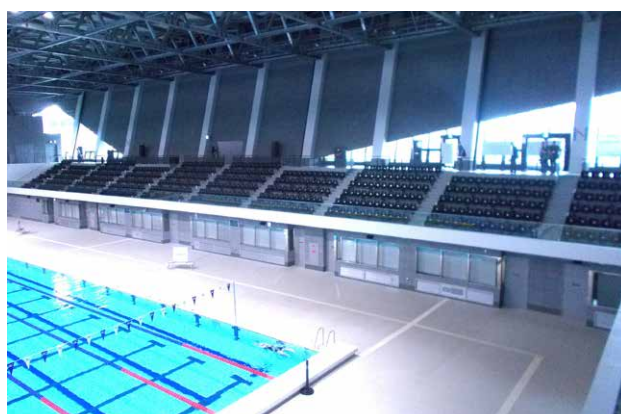
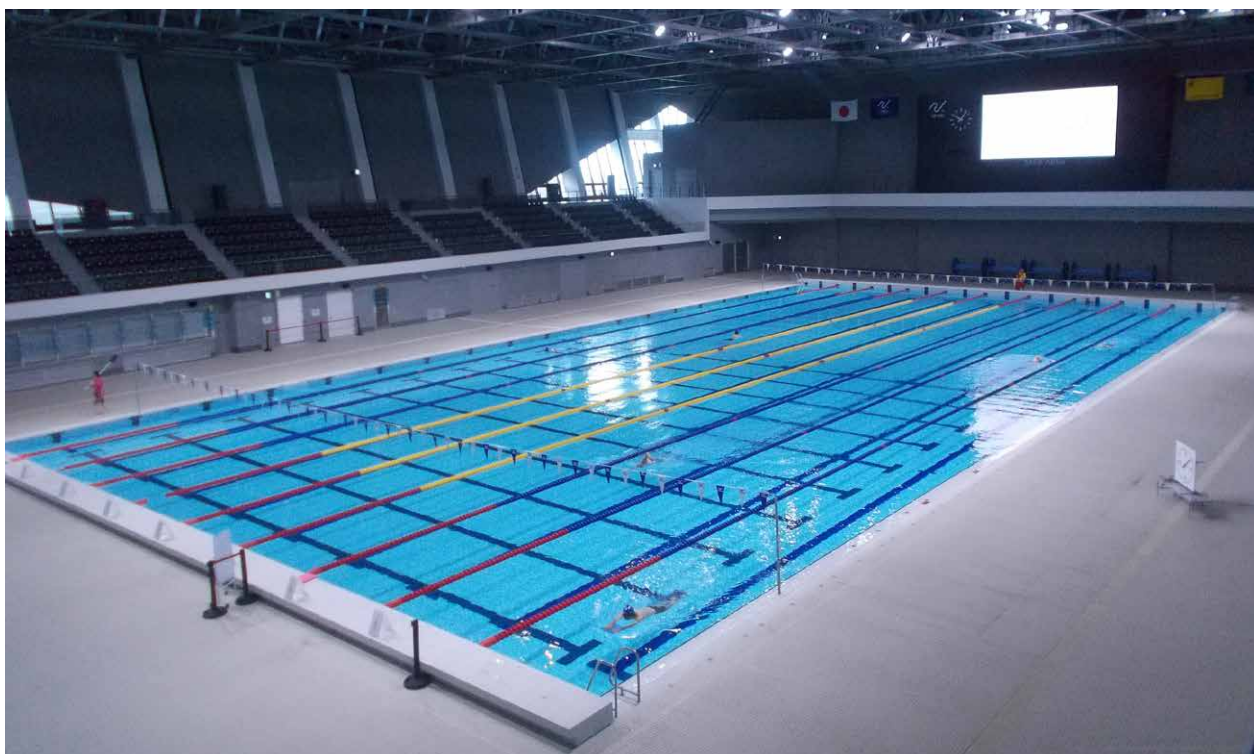
観客席約8,400席を誇る九州最大級の多目的アリーナ。最大勾配35度のすり鉢状の観客席は、全席ドリンクホルダー付きで様々なバリエーションを持つ。3つの大型ビジョンを標準装備し、迫力ある映像や光の演出、最新鋭のデジタル音響システムにより最高のエンタメ空間を創造する。

3階は全てプレミアムフロアとなっており、全部屋で飲食を楽しみながらパーティーや商談が可能。女性トイレの数は最大164で男性トイレの一部を女性トイレに変換でき、演者を引き立てる黒基調の会場や、選手の士気を高めるホームロッカールーム、スムーズな搬出入、物販スペースとしてサブアリーナの活用が可能など、演者や裏方も使いやすい施設で、ハード・ソフト両面においてUDに配慮されている。

バレーボールSVリーグのSAGA久光スプリングス、バスケットボールBリーグの佐賀バルーンズのホームアリーナとしてプロスポーツの試合や各種スポーツの国際大会、人気アーティストのコンサートやエンタイベント、学会や式典、展示会など多彩なイベントを開催している。







SAGA アクア

以前の屋外50mプールを公認規則に合致するように建て替えて屋内化し、あわせて建て替えた屋外飛込プール、既存の屋内25mプールとともに、新たな総合プールのSAGA アクアが完成した。

メインプールは、最大約1,800席の観客席や、大型LEDビジョン、音響設備等を備え、競泳、水球、アーティスティックスイミングなどトップクラスの大会が開催できる50m国際競泳プール。水深を変更できる最大水深3mの可動床を導入し、短水路使用ではプールを2つのエリアに分けてそれぞれ異なる水深にも設定可能で、誰もがスイミングを楽しめるプールとなっている。



グラスコート佐賀テニスクラブ

日本初の天然芝コートを多数有するテニスクラブとして1975年に創立。アメリカ原産の南方系夏芝を用いた天然芝14面のコートは日本随一の規模で、コートサイドには桜楓林や季節の花々、グリーン一色のコート風景を見渡せるテラスやビュールームを備えたクラブハウスなど、グラスコートで楽しむテニスならではの環境を整えている。

さらに、全天候舗装のインドアコートが2面、一部屋根で覆われた砂入り人工芝コートも5面あり、充実した設備を誇っている。